大官大寺金堂下層出土の土器

－大官大寺第１次

１　はじめに

奈良県明日香村小山に所在する国指定の史跡である大官大寺跡の大伽藍が、文武朝（697-707）の造営であることはすでに定説となった感がある。この文武朝造営説は、金堂基壇構築土やその下層から出土した土器が藤原宮期（694～710）の特徴を示すことを踏まえ、文武朝における堂塔造営に関する『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』の記載や、大宝２年（702）の造寺司任命といった『日本書紀』の記述[1)]にもとづいて唱えられたものである。

ところが、この所説の決定的裏付資料である出土土器については、昭和50年（1975）刊行の概要報告（『藤原概報５』）をはじめとして、「藤原宮出土土器と同型式」あるいは「藤原宮の時期」[2)]の土器群であるとの評価が示されただけで、その実体についてはこれまで公表されていなかった。そこで、大官大寺の歴史的変遷を考える上での重要資料であることに鑑み、当該土器群の内容についていささか詳しく報告し、情報共有を図ることが本稿の趣旨である。

２　出土土器

昭和49年７月から翌50年１月にかけて実施した大官大寺第１次調査では、15ヵ所ほどトレンチを設けて金堂基壇を断割調査しており（図186）、基壇構築土とその下層（暗青灰色土）から整理用木箱に約１箱分の土師器・須恵器が出土した。概要報告にも記されているように小片が多く、弥生土器や布留式の土師器甕など古墳時代以前の土器をも含むが、歴史時代の土器としては、土師器の杯Ａ・壺Ａ・甕・竈、須恵器の杯蓋・無台杯（杯Ｇ/Ａ）・杯Ｂ・平瓶・壺Ｋ・横瓶・甕などがある（図187）。

１は土師器杯Ａ。復元口径は18.5㎝だが、口縁部は約５％しか残存しておらず、数値の信頼性は低い。内側面に二段放射暗文、外側面には上半にミガキ、下半にヘラケズリを施している。注記には、「タチワリ内」と記されているだけで、厳密に出土層位を特定できないが、基壇構築土より下層からの出土品には「暗青灰色土」と記されているので、基壇構築土からの出土である確率が高い。

２～７は須恵器杯蓋。細片化しており、いずれも全形を窺い知りえないが、すべて口縁端部が垂下する形式のもので、非図化分も含めてカエリを有するものはない。

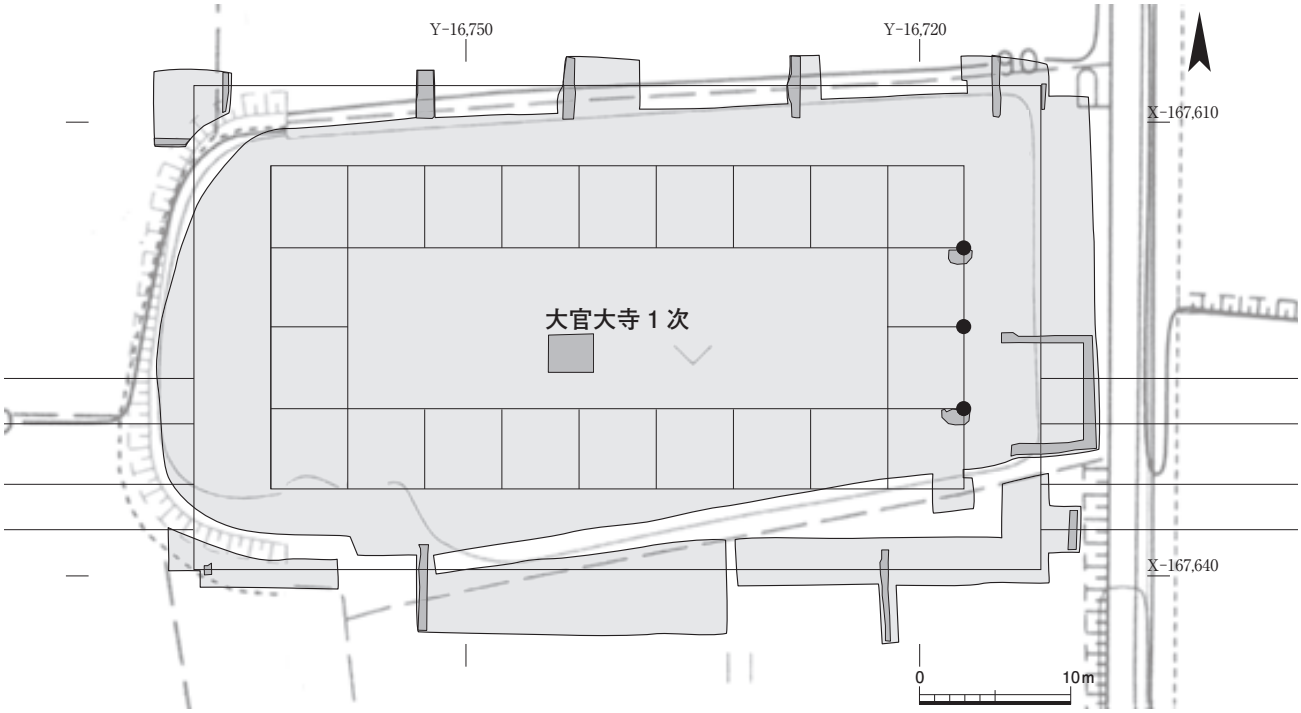

図186　大官大寺金堂周辺断割トレンチ配置図　１：500

２は灰白色硬質の焼成で、内面中央に非ロクロのナデ痕跡が残る。ロクロからのヘラ切りに際して生じた歪みを補正した痕跡であろう。「礎石抜取穴下の基壇土中」からの出土。３は鈕の付け根の括れが特徴的な形状を呈するもので、尾張産。上面に、焼成時の降灰による自然釉が厚くかかる。４の復元口径は15.6㎝で、口縁部残存率は５％強。灰白色でやや生焼け気味の胎土には、長石と微細な白色粒に加え、亜炭と思しき黒色粒子を含む。５の復元口径は16.6㎝で、口縁部残存率は15％弱。灰色を呈する胎土は緻密で、焼成は硬質。６の復元口径は18.5㎝で、口縁部残存率は10％弱。７の復元口径は20.4㎝で、口縁部残存率は同じく10％弱。６・７とも尾張産で、外面に厚く自然釉が降下している。

８は須恵器無台杯（杯G/A）。復元口径は8.9㎝で、口縁部残存率は25％弱。底部外面にヘラ切り後の軽いオサエ痕跡、内面中央に非ロクロのナデ痕跡が残る。硬質の焼成で、灰色を呈する胎土は比較的緻密だが、１㎜大の長石らしき白色粒を含む。

９は須恵器椀Ａか。口縁部を欠いており、無台杯（杯G/A）と考えられなくもないが、底部の厚みから椀Ａである可能性が高いと判断した。生焼け気味で、明灰白色を呈する胎土には１㎜大を超える長石・石英粒を多く含む。底部外面には、ヘラ切り後に軽くオサエを施すのみで、ヘラケズリ調整を認めない。

10～12は須恵器杯Ｂ。10は硬質の焼成で、暗青灰色の胎土には微細な長石粒を多く含み、器表面には黒色のタール状噴き出しがある。底部外面には、ヘラ切り後に高台を貼り付けているだけで、目立った調整痕跡はないが、「呑」の字の墨書がある。11は硬質の焼成で、表面が灰色、割れ口が暗赤色を呈する胎土には１㎜大の長石粒を含む。内面中央にロクロからのヘラ切りに際して生じた歪みを補正した痕跡と目される非ロクロのナデ痕跡を認めるが、やや煤けている底部外面にはヘラケズリなどの目立った調整痕跡はない。12はやや軟質の焼成で、灰白色の胎土には微細な長石粒を多く含む。尾張産で、外面底部には左回転でヘラケズリが施されている。

13は須恵器平瓶。大型の平瓶の口縁部片で、復元口径は13.7㎝。硬質の焼成で、灰白色の胎土には微細な長石粒を多く含む。

14は須恵器壺Ｋと目される壺・瓶類の底部片。黄灰色硬質の焼成で、胎土には0.5㎜大の長石粒を含む。

15は須恵器横瓶の口縁部片。灰白色を呈する胎土は比較的緻密で、長石と思しき微細な白色粒を多く含む。胴部はタタキ成形だが、残存部はわずかで、タタキ板や当て具の文様は判然としない。

16は須恵器甕の口縁部片。無文だが、灰白色を呈する胎土の質感から尾張産と目される。

なお、３～16はすべて基壇構築土よりさらに下層の包含層「暗青灰色土」からの出土である。

３　まとめ

全形をうかがい知ることができない破片ばかりであるため、細かく年代を絞り込むことが難しいが、大官大寺金堂造営年代を考える上での重要資料であることに鑑

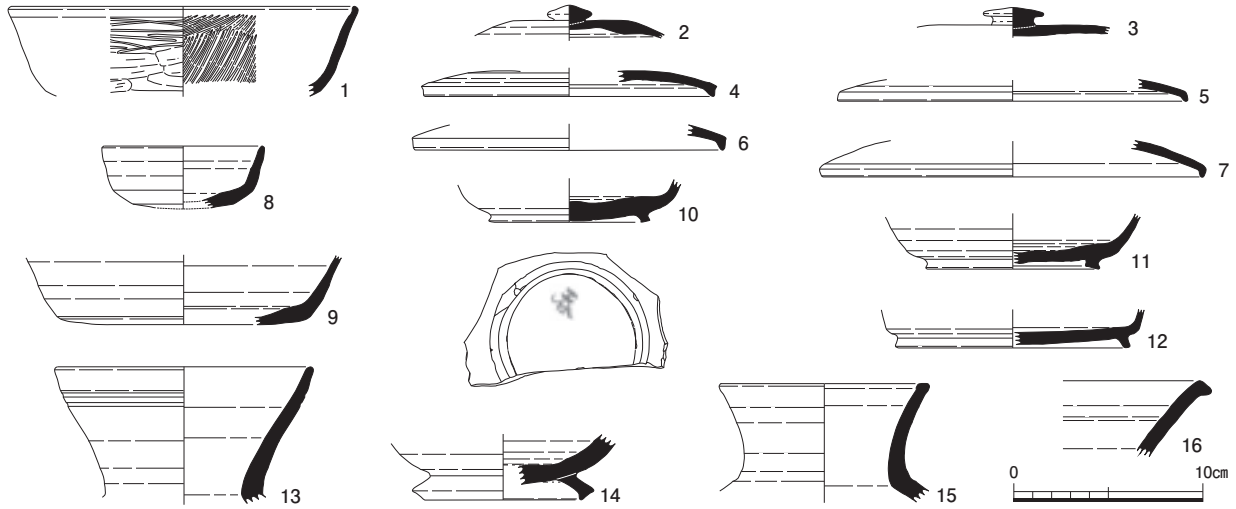

図187　大官大寺跡金堂下層出土土器　１：４

み、この土器群がいつ頃のものであるかを信頼性に留意しつつ考えてみよう。

土師器は、細片ばかりで復元値の信頼性が著しく低いため、法量(口径・器高)からの分析には適さない。しかし、端部を内側に巻き込む杯Ａの口縁の形状と、二段放射暗文の組み合わせは、これまで飛鳥Ⅳ・Ⅴの土器群として報告してきた石神遺跡Ｂ期整地土・SD640出土品（ともに飛鳥Ⅳ：『紀要 2018』）や藤原宮SD2300出土品（飛鳥Ⅴ：『紀要 2012』）の中に類品を見いだすことができる。

須恵器杯蓋がカエリのないものばかりで構成されている点は、藤原宮SD2300出土品と共通する一方で、尾張産が約半数を占めていることとともに、概ね持統朝（686～697）の土器と見なしうる飛鳥京SD0901出土品[3]とも共通性が高い。

口径8.9㎝と小型の須恵器無台杯（杯Ｇ/Ａ）は、飛鳥Ⅲの基準資料である大官大寺下層SK121出土品（『紀要 2001』）や、それより古く位置づけうる土器群には珍しくない存在だが、石神遺跡SD640出土品や藤原宮SD2300出土品には見かけない。しかし、運河SD1901Aとの関係から、天武天皇14年（685）以降に敷設されたことが確実な藤原宮朝堂院第二次整地土からの出土品（『紀要 2013』）にほぼ同じ大きさ（9.0㎝）のものがあるので、持統朝の初め頃までは残ると考えることができる。

須恵器椀Ａは口縁部を欠くが、口径は18㎝前後と推定できる。石神遺跡Ｂ期整地土出土品にはほとんど見かけない大きさのものだが、石神遺跡SD640や藤原宮SD2300出土品には珍しくない。

須恵器杯Ｂはいずれも口縁部を欠くため、口径からの分析には適さないが、10の高台径は実測値で8.4㎝である。この数値をこれまで飛鳥Ⅲ～Ⅴとして報告してきた土器群の須恵器杯Ｂと比較すると、石神遺跡Ｂ期整地土やSD640出土の杯Ｂには合致するが、藤原宮SD2300出土品には類例を見いだすことができない。大官大寺下層SK121出土品（飛鳥Ⅲ『紀要 2001』）の計測値も参考にすると、本例は飛鳥ⅢまたはⅣの須恵器杯Ｂによく合致しているといえる（図188）。

これまで、大官大寺金堂下層出土土器が藤原宮期のものと評価されてきたのは、須恵器杯蓋がカエリを持たない形式のものばかりであることが大きな理由と考えられる。しかし、改めて検討した結果、藤原宮期にまで降るかもしれない一方で、むしろやや古く見える要素がいくつか見いだされた。

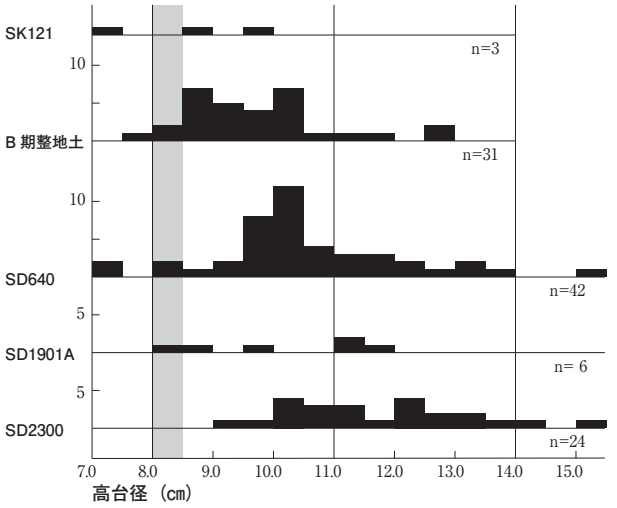

図188　須恵器杯Ｂの高台径の推移（飛鳥Ⅲ～Ⅴ）

それらを考慮するならば、飛鳥浄御原宮期（672～694）でも後半を中心とする時期、すなわち概ね持統朝の土器群と目される石神遺跡SD640出土品や藤原宮朝堂院第二次整地土出土品とほぼ同時期のものとみなすことも充分に可能であろう。

もっとも、ことさらに天武朝（672～686）初期まで遡らせて理解すべき積極的理由も見当たらないため、大官大寺の金堂の完成年代については、『日本書紀』天武天皇２年（673）条の造高市大寺司任命記事よりも、やはり『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』に記されている文武朝の堂塔造営に引き付けて理解することが妥当であると考えられよう。　**（尾野善裕／京都国立博物館・森川　実）**

註

1）『大安寺伽藍縁起并流記資材帳』に「後藤原朝庭御宇天皇、九重塔立金堂作建」とあり、『続日本紀』の大宝２年（702）８月条には「造大安寺司」任命の記事がある。

2）上野邦一「大官大寺跡における最近の発掘調査」『佛教藝術』129、1980。井上和人「大官大寺の発掘調査」『日本歴史』422、1983。

3）奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京Ⅳ－外部北部域の調査－』2011。